

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00171

研究課題名（和文）フェルナン・クノッフの絵画における象徴主義的手法についての研究

研究課題名（英文）Study about the symbolist rhetorics of f Fernand Khnopff's paintings.

研究代表者

喜多崎 親 (kitazaki, Cikashi)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：90204883

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀末から20世紀初頭に活動したベルギーの象徴主義の画家フェルナン・クノッフ（1858 - 1921）の絵画作品を対象に、象徴主義絵画のレトリックを分析した。従来、クノッフの象徴主義に関しては、そのモチーフの意味の解明が大きな柱となってきたが、その多くは明確な根拠に基づくものではなく、研究者の間でも解釈の分かれるものが少なくなかった。本研究では特に《私は私自身に扉の鍵をかける》《青い翼》《白、黒、金》などの作品の分析から、クノッフがイメージの意味を固定しない工夫をし、むしろイメージ間の相互関係（コレスポンド）を軸に意図的に暗示を創り出そうとしていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1880年代に始まる象徴主義の絵画については、その暗示性に関して、これまで主として様式面ではクロワゾニスムに代表される再現性からの離脱が、意味の面では芸術家独自の図像形成が、指摘されてきた。しかしフェルナン・クノッフの画面には、それにとどまらない画面上のイメージ相互の関係性による暗示的效果が認められた。これは、従来モチーフのソースとしてのみ関連性が認められ、技法面での関係性が希薄と考えられてきた象徴主義の文学運動、特に詩における暗示のレトリックとの類似として位置づけることができ、今後の文学及び美術における象徴主義研究に対して、新しい着眼点を提供するものといえる。

研究成果の概要（英文）： This study analyzed the rhetorics of symbolist paintings by the Belgian painter Fernand Khnopff (1858-1921).

The main focus of Khnopff's symbolism has been on elucidating the meaning of his motifs, but most of these have not been based on clear evidence, and many of them have been interpreted differently among researchers. In particular, this study analyzed works such as "I lock my Door upon Myself", "Blue Wings", and "White, Black, and Gold", and revealed that Khnopff made efforts to avoid fixing the meaning of images, and instead intentionally tried to create allusions based on the correspondence between images.

研究分野：美術史

キーワード：象徴主義 クノッフ 視覚的レトリック

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 絵画の象徴主義の曖昧性

象徴主義は、19世紀末にヨーロッパの芸術界を席卷した。それは文学においても美術においても、従来の明確な意味の伝達を否定し、人間の内面を暗示的に表現する傾向として位置づけられている。しかし、絵画の象徴主義においては、この暗示性は様式と意味とのふたつの領域に分かれてしまっていた。前者はポール・ゴーガンを中心とするクロワゾニスムであり、対象の再現的描写を避けることが暗示の手法と考えられた。もうひとつは、オディロン・ルドンやフェルナン・クノップフといった幻想的な作品を描いた画家達で、こちらは例えばファム・ファタルといったモチーフの意味の拡大に暗示性が指摘されてきた。この異なる二つの傾向は、時に同じ画家の中で両立しつつも、全く異なる側面であり、象徴主義絵画の定義を困難なものにしてきた。

### (2) 文学の方法論との乖離

暗示の効果は、美術に先駆けて1880年代に始まる象徴主義の文学運動、特に詩の分野で強調され、そのための理論や方法が探求されていた。しかし、もともと概念を表す言語と視覚的に形を再現する絵画とは同じ理論や方法を共有することは困難であり、それゆえこれまで両者の関係は、内面性や暗示、モチーフの共通性に留まっていた。

### (3) クノップフ研究における意味の探求

従って象徴主義絵画のうち、クロワゾニスムではない手法で描かれた作品に対しては、隠された意味の解明を主な目的とする研究が行われてきた。特に、世紀転換期にベルギーを中心に活動したフェルナン・クノップフについては、その通常の図像解釈に収まらない作品群が、各モチーフの意味の解明という方向で分析されていた。

### (4) ルドン研究などからの示唆

しかし近年、ダリオ・ガンボーニのオディロン・ルドン研究などによって、象徴主義絵画の暗示的效果が、意味の生成ではなく、むしろ意味の隠蔽・剥奪によって生み出されていることが指摘されるようになってきている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、クノップフ作品の分析を通じて、従来意味の解明や退廃的と言った印象的評価がなされがちであった象徴主義絵画に、ルネサンス以来の絵画が採用してきた叙述法からの逸脱を見だし、それを積極的に評価することにある。

具体的には、クノップフの絵画作品に認められる合理的説明のつきにくい空間構成や対象の提示の方法に対して、意味の伝達を阻害する手法として定位するのみならず、暗示のレトリックとして積極的に評価し、さらにそれを文学における象徴主義の手法との類縁性を指摘する。

このことにより、象徴主義絵画の中に、その後20世紀絵画に見られるようになる非再現的・主観的造形へと繋がる新しい要素を見出すことが可能になる。

## 3. 研究の方法

クノップフの何点かの代表作について、その先行研究の問題点を洗い出し、意味の追求の矛盾を明らかにした上で、画面上のレトリックの分析を行う。具体的には《私は私自身に扉の鍵を掛ける》(1891年、油彩・カンヴァス、ミュンヘン、バイエルン州立美術館)および、《青い翼》(1894年、油彩・カンヴァス、ブリュッセル、ベルギー王立美術館)とそのヴァリエーション《白、黒、金》(1901年、油彩・カンヴァス、ブリュッセル、ベルギー王立美術館寄託)を主に対象とした。

方法としてはまず、クノップフに関する先行研究が、主にモチーフの隠された意味解明に向けられてきたことに着目し、しかもその多くが恣意的で、研究者によって意見が分かれることを確認した。これによって、クノップフがむしろ意味の多義性あるいは暗示を目的として意識的に操作をしているという仮説に立ち、その方法を分析することを試みた。具体的には、クノップフ作品における、モチーフの同定、空間の合理性、フレーミングによる隠蔽、一部のモチーフ相互の類似といった特徴に着目し、それらがもたらす効果について、文学における象徴主義のレトリック、特にコレスポンダンスとの類縁性を検討した。

## 4. 研究成果

### (1) 《私は私自身に扉の鍵を掛ける》

同時代評以来、様々な解釈が試みられる中で、次第に手前の大きな平面が棺であり、女性は寡婦であるという解釈が主流になっていた。しかし、他にも多くの解釈が提示されており、それらを比較検討すると「寡婦」という解釈はかなり恣意的なものであることが判明した。また、作品の背景についても、それらが合理的な空間を構成していないことは明白で、むしろそれによって、この作品が明確な意味を形成するのではなく、むしろタイトルに用いられたクリスティーナ・ロセッティの詩が示すような、引きこもりたい願望を示唆することに留まっていることが確認された。

## (2)《青い翼》と《白、黒、金》

《私は私自身に扉の鍵を掛ける》に関する知見を踏まえて、1894年に描かれた油彩画《青い翼》と1901年に描かれたその素描によるヴァリエーション《白、黒、金》について考察した。この二作品は、縦長の画面中央に翼の生えたヒュプノスの頭部彫刻を置き、その後ろに立っている女性を描いている。構図とモチーフはほぼ同じだが、女性の手前に置かれた彫像が、《青い翼》では大英博物館所蔵の古代彫刻《ヒュプノス》を基にしているのに対して、《白、黒、金》ではルーヴル美術館の《モンドラゴーネのアポロン》に換えられている。従来ヒュプノスの彫像とその背景の女性は、眠りや死といったメッセージに結び付けられ、異教の神とその司祭と目されていたが、それは暗示された解釈の可能性の一つであり、決定的なものではない。なぜなら、司祭ならば女性は像の前に位置するべきで在るからである。

女性が像の後ろに置かれることで、像と女性との関係は偶像とその背後に顕現する神秘的存在のような関係へとずれていく。《白、黒、金》におけるアポロンの頭部は、うしろの女性と顔の輪郭や向きの類似を示している。こうして両者の間には意識的にコレスポンドンスの関係が提示され、女性が彫像から喚起される神秘的な存在であることをいっそう強く示唆すると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 喜多崎 親	4. 巻 23
2. 論文標題 喚起する類似ーフェルナン・クノップフの《青い翼》と《白、黒、金》	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 美学美術史論集	6. 最初と最後の頁 389 - 418
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------